

## つる性インゲンマメとジベレリン(GA)処理したわい性インゲンマメの収量と収益性の検討

島袋貴弥・八幡大智・坂本守章  
(県立農業大学校)

沖縄県のインゲンマメは冬春期の生産では全国一の生産地で、主に関東出荷(平莢種)のつる性「ケンタッキーブルー」が生産量の約80%を占めている。関西出荷(丸莢種)はわい性の「キセラ」が栽培されている。しかし、わい性は草丈が低いいため収穫作業で腰の負担が大きく、栽培が敬遠されて年々減少の傾向を示している。

わい性インゲンマメにGAを処理すると節間が伸長し、節に光線が多く照射され、不定芽が多く形成し長期栽培が出来る。また、草丈が低いため中腰姿勢での作業や収穫に負担が大きいという点を、GA処理で草丈を伸ばし収穫作業が楽に行われる利点がある。

本プロジェクト研究は、価格の高い冬春期に安定した生産を得るため、つる性インゲンマメの2作とGA処理されたわい性インゲンマメの1作長期栽培の収量の比較を行い、収益性を明らかにした。

### 材料および方法

農業大学校内の鉄骨ビニールハウス(間口8m×奥行36m)の2連棟ハウスにおいて、つる性品種ケンタッキーブルーとわい性品種キセラの2品種を供試し、プロジェクトを開始した。

播種は2005年11月3日、2006年2月1日(つる性・2作目)、GA処理(5ppm)は11月10日に株全体に散布した。施肥量は基肥で有機684(15kg/N)、油かす(5kg/N)、化成804(5kg/N;わい性のみ)を施用し、追肥は収穫開始期から1回/月の割合で住友液肥2号を(1.8kg/N)施用した。

栽培方法は畦幅1.6m(1棟:4畦)、株間0.4mの2条植で1穴に3粒播種し、生育の良好な株を2本に仕立てた。

GA処理は子葉展開時に5ppmの濃度で株全体にまんべんなく散布し、散布後はハウスを密閉にして通路に水を流し、ハウス内の温度を高め蒸し込みを行った。処理翌日から早朝は気温を高めにし、夕方は早めにハウスを閉じGAの効果が高めるため高温・高湿度にハウスを管理した。

### 結果および考察

1. GA処理後、11月20日(10日後)まで1日当たり約10cmの高さで伸長し、処理後20日までに14.1cmとかなりの高い伸長を示した(第1図)。

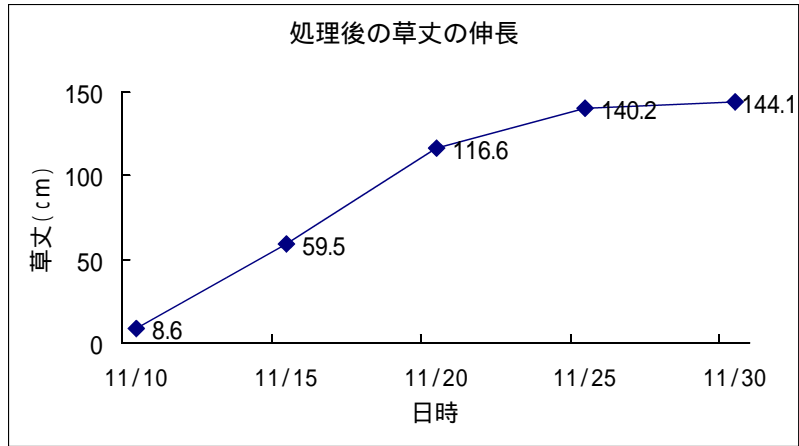
2. 12月の低温により両品種とも収穫開始が予定より5日遅れ、12月末から収穫が開始し、つる性品種は1月23日で1回目の収穫が終了した。同株で2回目の開花の収穫を検討したが、2回目の収穫を行うと2作目が出来ないため栽培を終了し、2月1日に同じ株穴に播種し、4月4日から収穫を開始した。

3. つる性品種のケンタッキーブルーは1月11日から本格的に収穫が開始され、1作で849kgの収穫が得られた。2作目は4月4日から収穫が開始し、2番花まで収穫したため1714kgと1作目の2倍の収穫で、総計で2563kgが得られた(第2図)。

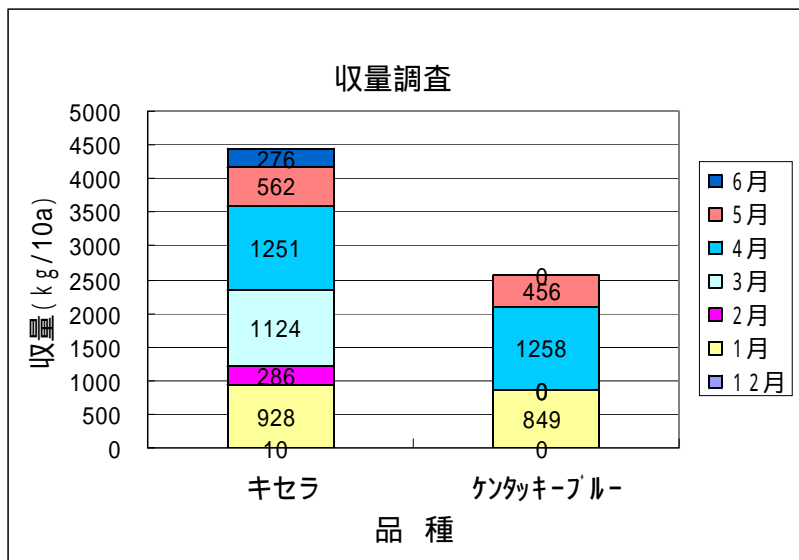
4. わい性品種のキセラは1月4日から本格的な収穫が開始し、つる性品種に比べて約1週間の早期収穫が開始された。1番花は1月30日で終了し938kgの収量が得られた。2番花は1番花の収穫後半から開花が始まり、2月15日から収穫、その後は次々と開花が行われ6月20日まで収穫が行われ、総計で4437kgとケンタッキーブルーに比べてかなりの高収量が得られた(第2図)。

5. 平均単価はキセラが若干の高い傾向を示した。その理由として、ケンタッキーブルーは莢肥大が早く、B品がキセラに比べて多く出荷されたためだと考えられる(図3)。

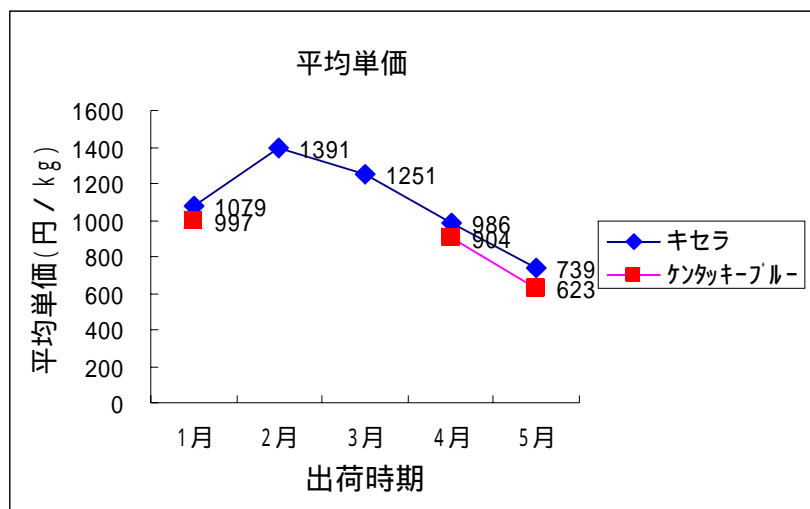
その結果、わい性インゲンマメにGAを処理することで高値の2・3月も連続的に収穫が出来、しかも、つる性に比べて収量が高く、栽培面積の少ない農家には有利な技術と考えられる。



第1図 G A 処理後の草丈伸長の変化 .



第2図 キセラ・ケンタッキーブル品種の時期別収量の変化 .



第3図 県外出荷の平均単価 .